UUCollege・Newsletter　No.2

2 期生 39 名入学。あわせて 90 名で後期がスタート

10 月 1 日に 2 期生が 39 名入学し、後期の授業が開始されました。現在の受講者数の現況は次の通りです。

	2018	2019
1期生 2018年度 入学者数	54 女17 男37	51 女16 男35
2期生 2019年度 入学者数		39 女18
合　計	54	90

平成30年度の後期に入学した1期生54名のうち、3名は、2019年度前期をもって修了されました。それぞれ、所期の目的を達成された方、家庭の事情による方、受講を契機に新たな学習課題を発見されて修了された方でした。その中から、所期の目的を達成された三宅徹治さんの手記を裏面に掲載しましたのでご参照下さい。

三宅さんは後期、前期あわせて7科目を受講されました。選択された科目は、歴史、自然、心理、健康、国際関係など様々な分野をわたっており、ご自分の課題にアプローチされました。

他の受講者の方々の中にも、新しい学習課題の発見によって、大学院進学など次の学びへ向けて活動を開始されている方もいます。

受講科目数では、1科目が最も多く、次に2科目選択となっています。1期生では半期に4科目を受講された方が延べ5名いました。

延べの科目数としては、1期生、30年度後期が80科目、元年度前期が86科目、元年度後期が75科目です。2期生は元年度後期62科目となります。平均しますと1人1.6科目受講していることになります。

College　Episode

8 月 29 日、UU カレッジに学ぶ受講者相互の親睦を図ることを目的として、受講者の自主的な交流組織「UU カレッジの会」が設立されました。今後、会員有志による研修会、勉強会、親睦会など開催する予定です。会長に田中幸男さん、副会長に新見徹さん、会計に入江文乃さん、監事に大島和枝さん、丹生英昭さん、関澤美智子さんが就任しています。宇大側も天沼実ディレクター以下、コーディネーター、メンターが顧問に名前を連ねています。

設立の趣旨を説明する田中さん

設立総会直後の懇親会の様子。
懇親会には、天沼ディレクター、廣瀬コーディネーターが参加して、受講者との懇親を深めました。

1 期生修了者の手記

アクティブ・ラーニングって何だ

UU カレッジ　三宅徹治

社会に出てから宇都宮市関連の委員会や研修会に参加して、実に多くのワークショップが行われているのに驚きました。1960 年代に教育を受けた私には経験のないものでした。「学生の受講成果は講師の知識を上回ることはない。教える者は、講義の何倍もの準備をせよ！」というのが常識でした。そんな感覚の私は、ワークショップはメンバーのレベル以上のものは生み出さないと考え、その有効性に疑問を持っていました。

調べてみるとワークショップのベースは、2012 年中央教育審議会答申を受け、大学に本格的に導入されたアクティブ・ラーニング(※)にあるということが分かりました。

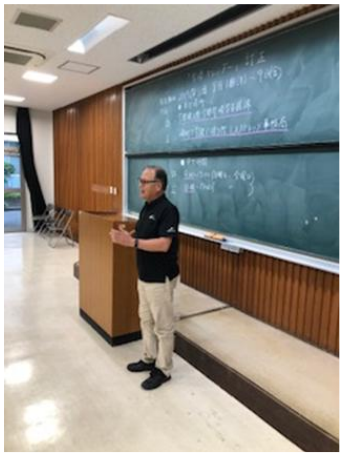
今回、UU カレッジに参加する機会を得て、アクティブ・ラーニングが大学のなかでどのように機能しているのかを体験したくなり、特に実践されているという基盤教育を７科目受講しました。科目の半分くらいは一方通行の従来型（私にはすんなり入ってきます）でしたが、残りはワークショップや毎回講義の最後に自分の意見を述べるリアクションペーパー提出といったアクティブ・ラーニングらしい形態でした。

ワークショップに参加して、学生が短時間に自分の意見をまとめ発表する姿に驚きと頼もしさを感じました。もちろん基礎となる知識は必要ですが、常に自分としてこの課題をどう捉えるかと反芻する学習法は、イノベーティブな人材を育てるとの期待がもてました。

アクティブラーニングをより機能させるための学生姿勢としては、地球温暖化対策の国際会議で行われた「タラノア対話」の３つの視点が有効だと考えます。それは、①我々はどこにいるのか。②どこへ行きたいのか。③どうやって行くのか。です。
いまや世界的潮流である SDGs は、今、持っている知識や資源を総動員して社会課題を解決しようとするもので、従来型の教育では対応しきれないものだとも感じました。

１年間という短い時間でしたが、若い学生と机を並べ、アクティブ・ラーニングを体験し、未来に希望が持てた気がしました。ありがとうございました。

注※ これは、中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」の中に出てくる言葉であり、大学教育の在り方について使われる用語でした。答申では、次のように記されています。 「生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である。」
宇都宮大学の全てのシラバスには、アクティブ・ラーニングの度合いを示す指標(AL 度)が設けられており、積極的に進められています。(注は、カレッジ事務局)



（写真は、7 月 6 日の中間ふりかえりの際に、学びの成果を発表される三宅徹治さん）